

「子どもたちの心の声を聴く」 ～0歳からの教育～

学校法人島田学園 理事長 島田 教 明



我が国では少子高齢化が急激に進んでいます。国においては、「少子高齢化・人口減少は我が国が直面する最大の危機。若年人口が急激に減少する2030年代に入るまでが、この少子化のトレンドを反転させるラストチャンスである」との見解を示し、少子高齢化を最重要課題として施策を進めています。

私どもの園がある防府市は、市外への転出よりも転入する人口の方が超過する社会増の状況にあります。農業試験場や林業試験場が農業大学校と移転・統合した「山口県農林総合技術センター」の開所、新たな企業誘致など活気のある施策が進み、人口減少が進む他市町村に比して社会増が多い自治体となっています。しかし、本市においても新生児の出生数は減少傾向にあります。その主な要因は、晩婚化や非婚化の増加に加え、コロナ禍における出生数の減少があげられています。

こうした社会状況の中、国においては令和4年に「こども基本法」を制定し、子どもに関する取組・政策を社会のまんやかに据えていく「こどもまんやか社会」の実現を目指しています。その一環として、令和6年度から、保護者の就労の有無に関係なく、時間単位等で柔軟に利用できる「こども誰でも通園制度（仮称）」を打ち出し、子育て家庭を支援し、全ての子どもの育ちを応援するなど、出産しやすい環境の整備を進めています。

本園では早くから、保護者の皆様と連携した子育て支援や子どもたちの自立を大切にした教育の充実を目指してきました。

このため、子育て支援につきましては、平成27年度には幼稚園から認定こども園に移行し、0歳～6歳の子どもたちの保育・教育を進めています。それは主に母親の皆様が就労される場合、下の子を他の保育園に預けなくてもいいようにしてほしいという要望があったからです。さらには、兄弟姉妹で教育と保育認定が混在する状況もありますことから、コロナ禍を契機に夏休み等の長期休業をなくしました。また、コロナ禍、休園する園も多くありましたが、本園では登園自粛としました。医療関係に勤務されて新型コロナ感染と戦っておられる保護者の方、また、その関連で仕事を休むことができない状況にいらっしゃる家庭もありました。このため、多様な働き方やライフスタイルに応じた支援が必要と考えてのことでした。

また、保育・教育の充実につきましては、本園では20年以上前から、北欧の幼稚園で実践されている幼児教育論「スマート・プロジェクト・メソッド」を導入しています。乳幼児期の保育・教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものです。子どもたちは、遊びや日常生活で毎日さまざまな体験を通して発達をしていきます。この幼児教育論では、子どもたちの年齢や発達段階に即して、子どもたちが主体的に活動すること（アクティブ・ラーニング）を大切にした保育・教育を進めています。

このため、本園では季節ごとの行事、地域の工場や施設の見学、作品展や音楽会といった子どもたちが主体的に参加できる体験活動を実施してきました。しかし、

突然見舞われたコロナ禍、長引くにつれ中止を迫られる行事も多くなっていました。コロナ禍が終了すれば園行事や保育活動もコロナ禍以前に戻せると考えていた時期もありましたが、そのことを嘆くのではなく、「ピンチをチャンスに」と考え方を変えて、その行事や活動の実施意義という根本に立ち返り、見直しを進めました。保護者の皆様や地域の方々にも実施方法や内容などについてご理解、ご協力を賜り、困難下にあっても多くの活動を実施することができました。新型コロナという外圧ではありましたが、結果的には本質に迫る精選を進めることができました。その際に、「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」という教育における不易と流行を、つまり、時代とともに変わっていくものと、どのように時代が変わろうとも大切にしなければならぬものがあることを再認識しました。

AI (Artificial Intelligence : 人工知能) など社会における高度情報化技術の急激な進歩、未曾有の少子高齢化、地球温暖化、地域紛争など、子どもたちを取り巻く環境が急激に変化しています。近未来の社会をも予測することが非常に難しくなってきました。これからの社会を生き抜く子どもたちには、自分の力で未来を切り拓いていく「生きる力」がますます求められています。

私が敬愛する倉橋惣三先生は、『子どもは「自ら」育つ存在だとして、自発性を促す』ことを大切にされました。いつも子どもの心に寄り添うことを信条とされた姿が、先生の著書「育ての心」の中の詩に表れています。

「ほいほい子」

ほいほい子とは、ほいほい可愛がられて育つ子どものことをいったのである。大切に可愛がられて育つくらい幸せなことではない。しかし、その幸せはどこまでほんとうの幸せか。目の前の幸せばかりが一生の幸せではない。〈中略〉

やや成長してから、ほいほい子の受ける害は独立心の出来ないことである。一から十まで人の世話になって、お乳母日傘(*)で大きくなる子に、独立というような強い力が出るはずはない。すべて精神の発達は「やってみること」「自分で失敗してみるから出来てゆく。やってみないで何の自信が出よう。〈中略〉

(*) おんばひがさ：うばに抱かれ、日傘をさしかけられるなど、過保護の様子

我が子に財産を残してやることもいいかもしれない。我が子に学問をさせておいてやることは尚更いい。しかし、我が子に独立心を養っておいてやるほど大切なことはない。ただ目の前に安楽を与えて、この独立心を与えない程、我が子の為に実に不親切なことではない。

『育ての心』より

私たちには、幼稚園創立以来、大切にしてきた教育者としての思いがあります。それは、「子どもたちの心の声を聴く保育・教育」ということです。時代がどのように変わっていこうとも、私たちは、この思いを大切にしながら、輝かしい「子どもたちの未来」に責任をもって保育・教育を進めていきたいと考えています。

保護者の皆様には、お子様の保育・教育の場として「認定こども園 中関幼稚園」を選んでいただき、皆様とご縁を得ましたことを心から感謝申しあげますとともに、皆様方のご期待に応えられますように、教職員一同、日々精進しますことをお誓い申しあげます。

これまでの本園での実践を出版しています。

「21世紀の保育モデル」〈2008、オクターブ出版〉

「0歳からの教育」〈2012、オクターブ出版〉

その他、関連書籍が多数あります。